

## 北村透谷の著作と中国文学の対比研究：受容と影響の可能性についての試論

楊, 穎

<https://doi.org/10.15017/1440993>

---

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：全文ファイル公表済

## 論文審査等の結果の要旨

本論文は、明治20年代に活動した北村透谷の著作に対する中国文学の影響の可能性について追究したその成果である。周知のように、明治に入って西洋の文学が流入し、明治文学の形成に少なからず影響を与えた。しかし、明治20年代はそれまで多大な影響を及ぼしていた中国文学の影響の痕跡がまだ色濃く残っている時期であり、それが西洋文学からの影響と拮抗していた時期であると言える。北村透谷は、論文でも強調されているように、少年期から中国のとくに古典文学に強い興味を持ち、漢詩なども創作し、その分野についての知識を蓄えていたが、他方、青年期にキリスト教に入信し、その関係から西洋文学についての知識も増やしていった。その意味で透谷は、この時代の文学史を特徴づける中国古典文学と西洋文学からの影響の混在を、個人的に身を持って体現していたことになる。

透谷の著作における西洋文学の影響の可能性については従来、バイロンからの影響などを中心に、かなりの部分まで究明され、多くの点が解明されてきた。それに比べて、本論文でも確認されているように、中国文学との関係の解明は比較的手薄であった。本論文はその空白部分を埋めようとする試みである。

第一章では、透谷の少年期の家庭環境、教育環境、縁者や友人、透谷自身が作った漢詩などを検討することにより、透谷が早くから中国古典文学に親しむ環境にあり、十分な漢学の素養を身につけていたことを確認している。この章は、透谷の中国文学への親炙の前提条件を説明する章として有効に機能している。

第二章から第三章までは、透谷の詩と小説の二つのジャンルに分けてそれぞれ中国古典文学との関連性を論じている。

第二章第一節では、透谷の処女作「楚囚之詩」の「楚囚」という言葉に関して、屈原の『楚辞』との親近性を論じている点は一定の説得性があると評価できる。すなわち「楚囚」とは、透谷が楚国の屈原の愛国的感情を借りて同志であった大矢正夫を暗示したものであり、「楚囚之詩」は、屈原の『楚辞』の比興の手法に依拠して、透谷と大矢の昔の友情を回想した作品であると論じている。第二節では、劇詩「蓬萊曲」の中の、現実世界で愛していた女性が死後、仙女になったというストーリーのヒントを『長恨歌』から得た可能性について、透谷の日記を援用しながら考察している。第三節では、透谷の詩の分野での絶筆となる「露のいのち」を描き出すまでの五ヶ月の間に、ほたる、蝶、露の三つのイメージが使われていることに着目し、「ほたる」と杜甫の「螢火」、蝶の三部作中の秋と死のイメージと白楽天の「秋蝶」とのかかわり、あるいは『梁山伯と祝英台』の物語との関連性について考察している。これらの論証の多くはこれまでなされていなかったものである。

第三章では、小説「宿魂鏡」の「鏡」という装置に焦点を絞り、従来指摘されている『紅樓夢』との類似点と相違点をそれぞれ再考察した上で、特に、その相違点に注目し、中国古典文学に見られる鏡に関する説話と結びつけ、そこから透谷が受容した可能性のある作品との関連性を考察している。

第四章では、中国近代文学界における透谷の受容について論じている。第一節日本に留学した魯迅と周作人が、どのように日本の浪漫主義に出会い、北村透谷とかかわ

りを持ったかという点について考察している。第二節では、近代中国における北村透谷についての研究の状況をめぐって、戦前と戦後に分け、それぞれを紹介した上で、透谷研究に関する不備を指摘している。

本論文の意義については、まず、中国古典文学と透谷の詩および小説の関係の考察を行なっている点を指摘することができる。透谷の評論と中国文学の関係についての研究は少ないながらも行われていたが、詩と小説についてはほとんど行われていなかったからである。

本論文は、透谷と中国のとくに古典文学との関係の研究史において、その研究の空白部分を補充する役割を担う研究であり、各章に含まれる考察は一定の説得性のあるものとして評価できる。中国文学が透谷の著作に及ぼした影響については、本論文で触れられなかったものが今後、新たに発見される可能性が残っていると推測される。しかし本論文は、透谷の創作の秘められた過程に光を当てることによりかなり成功しており、比較文学的研究の分野においてだけでなく、広く透谷研究においても学問的寄与をなすものであると考えられるため、この業績に対して、博士号（比較社会文化）を授与するにふさわしいと判断した。

【2,000字以内で記入すること】

(比甲様式 13-3)

試験又は学力確認の結果の要旨

甲 第 号 氏 名 楊 穎

調査委員  
主査 西野常夫  
副査 松本常彦  
副査 太田一昭  
副査 秋吉 収  
副査 東 英寿

試験又は学力確認の結果の要旨

2014年2月18日午前10時30分より、伊都キャンパス比文言文棟321号室において楊穎氏の博士論文公開審査を実施した。最初に申請者が博士論文の概要を説明し、続いて、論文の内容について、各調査委員と申請者の間で順に質疑応答が行われた。申請者は調査委員の質問に対して的確に答え、説明を補足した。公開審査終了後、論文の内容および公開審査での質疑応答について調査委員で合議し、その結果、申請者が博士（比較社会文化）の学位を授与されるに十分な学力を有すると判断した。